中等國語新文典　一卷

4a
815
明38

42002
教科書文庫
4
810
41-1905
20000
72709

4a
815
明38

明治三十八年三月一日
文部省檢定濟

高橋龍雄著

中等國語新文典

東京　啓成社發兌

広島大学
72709
図書

資料室

中等國語新文典の序

近年中學校用文典教科書類の刊行甚だ盛んにして、その書名も一々記憶し難きほどなるが、概して新に出でたるものは、改良進歩の見るべきものあるが如し。而して本書の如き、正にその一なるべし。

著者は、斯道教授につきて、實地の經驗を有し、またかねて深く言語學に意を傾け、嘗て、師範・中學兼用の教科書として、大町桂月氏と共に、國語新文典四册を著はしたるが、その組織の整然たると、繁簡その宜しきを得たるとにより、果して各府縣幾多の學校に採用せられたるを聞けり。爾來著者は、孜々として怠らず、なほ多くの經驗と知識とを重ねて、ここ

に本書を著はすに至れり。

余の如き中學教育につきて、實地の經驗なきものといへども、なほ本書を通覽して、如何にもその教授の實際に適中すべきを疑はず。殊に口語の挿入に關しては、苦辛の跡、歴々として見るべく、生徒の知識を啓發する點において、蓋し多大の効果を收むるに足らむ。また假名遣を説くに、活く詞と活かざる詞とを分ち、各品詞を教ふるに、漸次簡より繁に、易より難に進みたるが如き、その他音韻につきては、聲音學上の新しき見地によりて、簡明にこれを叙述し、文章法につきては、時文を基礎として、その適切なる誤謬を指摘したるが如き、皆誠に見るべきものと謂ふべし。

但しその用語分類等に關しては、余はなほ本書に望まし

き節なきにあらざれども、教科書なるが故に、強ひて世間普通の用語分類等を襲用したるものなるべければ、敢て茲に是非すべき限にあらずと信ず。

とにもかくにも、余は常に著者が斯道に於ける熱心家なるを知るが故に、今後に於ても、多々ますます勉勵して、この種の良教科書を編纂せられむことを、切望するものなり。

明治三十七年十月　　上田萬年しるす

中等國語新文典　一の卷

凡例

余嘗て大町桂月氏と共に、師範學校・中學校兼用の教科書として、國語新文典全四册を著したるが、その後、中學校教授要目發表せられ、各府縣にて、中學專用の國文典を需めらるるに至れり。よりて、本書全五册はその趣旨に基き、中學各學年に毎一册を配當して、編纂したるものなり。

本書中の音韻は、最も普通に使用せらるるもののみを掲げ、字音假名遣には、あまりに重きをおかず。而して各章文語と口語との對照に力を用ひたり。

本書中の國語綴字法は、活く語に力を注ぎ、いはゆる體言

の假名遣は、なるべく省略せり。もし假名遣の全體を悉く教授せむことを望まるる人は、國語新文典二の卷を參照せらるべし。

本書は、毎章毎節その練習問題に最も注意を加へ、苟も本文にて教授せしことは、必ず反覆丁寧にこれを教練せしめむことを力めたり。

本書中には、およそ三學期に配當して、復習雜題の欄を設け、前前章にて教授したることを總合して、十分に文典を會得せしめむことを期せり。

明治三十七年九月　　高橋龍雄識す

中等國語新文典　一の卷目次

第一章　總論

言語―文字―文章―口語―文語―文典……一

第二章　文字

五十音圖―濁音假名―次清音假名―鼻音假名―長音符―練習問題……二

第三章　音韻

第一節　略音―約音―延音―音通―練習問題……六

第二節　音便―促音―鼻音―練習問題……八

第三節　拗音―字音―長音―練習問題……十三

◉復習雜題……十七

第四章　綴字法

第一節　い—ゐ—ひ—練習問題……十九
第二節　う—ふ—練習問題……二十二
第三節　え—ゑ—へ—練習問題……二十四
第四節　お—を—ほ—ふ—練習問題……二十六
第五節　わ—は—練習問題……二十八
第六節　じ—ぢ—練習問題……三十
第七節　ず—づ—練習問題……三十二
◉復習雜題……三十四

第五章　品詞

第一節　名詞—練習問題……三十七

目次をはり

第二節　代名詞—練習問題……三十八
第三節　動詞—練習問題……四十一
第四節　形容詞—練習問題……四十三
第五節　副詞—練習問題……四十五
第六節　接續詞—練習問題……四十七
第七節　感動詞—練習問題……四十九
第八節　助動詞—練習問題……五十一
第九節　助詞—練習問題……五十三
◉復習雜題……五十六

中等國語新文典　一の卷

第一章　總論

人の音聲の意味あるものを**言語**といひ、その言語を書きあらはすものを**文字**といふ。

文字によりて、人の思想がまとまりて書きあらはさるるを**文章**といふ。

文章には、**口語**の文章と、**文語**の文章とあり。

（口　語）　本を讀まう　字を書いた

（文　語）　本を讀まむ　字を書きたり

勉強せねばならぬ　勉強せざるべからず

口語にもあれ、文語にもあれ、その文章の法則を研究するものを**文典**といふ。

第二章　文字

わが國の文章は、漢字と假名とにて綴らる。假名に片假名と平假名との二種あり。

（片假名）

阿列　伊列　宇列　江列　於列

阿行　アイウエオ

加行　カキクケコ

佐行　サシスセソ

（平假名）

阿列　伊列　宇列　江列　於列

あいうえお

かきくけこ

さしすせそ

多行　タチツテト　たちつてと

奈行　ナニヌネノ　なにぬねの

波行　ハヒフヘホ　はひふへほ

麻行　マミムメモ　まみむめも

也行　ヤイユエヨ　やいゆえよ

良行　ラリルレロ　らりるれろ

和行　ワヰウヱヲ　わゐうゑを

右の如く排列したるを**五十音圖**といひ、その縦を**行**といひ、その横を**列**といふ。

也行のイ・エと和行のウとは、阿行のイ・エ・ウと同字なり。されば、五十音圖も、その文字の數は、四十七文字なり。

また假名文字の右肩に、二點をつけたる文字あり。

ガギグゲゴ　がぎぐげご
ザジズゼゾ　ざじずぜぞ
ダヂヅデド　だぢづでど
バビブベボ　ばびぶべぼ

これらを**濁音假名**といふ。

また、假名文字の右肩に、圈點をつけたる文字あり。

パピプペポ　ぱぴぷぺぽ

これらを**次清音假名**といふ。

また、五十音文字の外に、

ン　ん

の文字あり。これを**鼻音假名**といふ。

また、符號を用ひて、文字の代りとするものあり。例へば、

ビール　ベースボール

の如く、或音を長く引く時に直線を用ふ。これを**長音符**といふ。

その他ちゝ、はゝ、またみなゝ、かはるゝなど書きて、同音を繰返す時に用ふる符號文字あり。

練習問題

一　五十音圖の中、同じき形の文字幾箇あるか。

二　五十音圖の也行と和行とを正しく發音せよ。

三　濁音假名の中、最も發音の紛らはしきものを示せ。

四　五十音圖以外のすべての假名の數を問ふ。

五　假名文字の總數を計算せよ。

六　阿行・波行・也行・和行を平假名と片假名とにて記せ。

七　五十音圖を横列に暗誦してみよ。

八　符號文字を含める五箇の例語を示せ。

第三章　音韻

第一節　略音　約音　延音　音通

まがりたま(曲玉)　を　まがたま
うめがえだ(梅が枝)　を　うめがえ

の如く、一語の中にて、或音を略するものを**略音**といふ。

さしあげ(差し上げ)　を　ささげ(捧げ)
べくあらず　を　べからず

の如く、一語の中にて、或二音を一音に約するものを**約音**といふ。

いふ　を　いはく

すみ(住み)　を　すまひ

の如く、一語の中にて、或一音を二音に延ばすものを**延音**といふ。

きのは(木葉)　を　このは
さびし(寂し)　を　さみし

の如く、一語の中にて、或音を他の音に通はしていふものを**音通**といふ。

練習問題

一　略音と約音との區別を例語にて示せ。
二　延音とは何ぞ、例をあげよ。
三　音通とは何ぞ、例をあげよ。

次の諸語を略音・約音・延音・音通の四種に分て。

とやま（富山）　あかし（明石）　おもし（重石）
あぶみ（足蹈＝鐙）　さかや（酒屋）　あまがさ（雨笠）
たはぶれ（戯）　かぶり（冠）　かなもの（金物）
はるさめ（春雨）　いはく（曰）　見るべからず
かかげ（掲げ）　もたげ（擡げ）　ほのほ（火穂＝焔）

第二節　音便　促音　鼻音

（キ）字を書き（て）たり　を　字を書い（て）た。
よき人　を　よい人

（ギ）刀を研ぎ（て）たり　を　刀を研い（で）だ。
徳を仰ぎ（て）たり　を　徳を仰い（で）だ。

（シ）山は高し　を　山は高い。
冬は寒し　を　冬は寒い。

の如く、**き・ぎ・し**の音の、**い**に通ふものあり。これを**伊音便**といふ。

（ヒ）岸に沿ひ（て）たり　を　岸に沿う（て）た。
道を問ひ（て）たり　を　道を問う（て）た。

（ク）山高くして　を　山高うして
辛くして　を　辛うじて

（ム）散歩に行かむ　を　散歩に行かう。
人も多からむ　を　人も多からう。

の如く、**ひ・く・む**などの音の、**う**に通ふものあり。これを**宇音便**といふ。

（チ）戰に勝ち（て）たり　を　戰に勝っ（て）た。
敵を撃ち（て）たり　を　敵を撃っ（て）た。

(ヒ)
飯を食ひたり　を　飯を食った
仰せに從ひたり　を　仰せに從った

(リ)
山に登りたり　を　山に登った
蕨を取りたり　を　蕨を取った

の如く、ち・ひ・りなどの音をつめて呼ぶものあり。これを**促音便**といふ。

促音便をあらはすには、っ文字を側に小記す。

(ク)
生命を輕くし　を　生命を輕んじ
君命を重くし　を　君命を重んじ

(ニ)
死にたり　を　死んだ
往にたり　を　往んだ

(ビ)
高く飛びたり　を　高く飛んだ

(友を呼びたり　を　友を呼んだ
(ミ)
水を呑みたり　を　水を呑んだ
本を讀みたり　を　本を讀んだ

の如く、く・に・び・みなどの音をんの鼻音に呼ぶものあり。これを**鼻音便**といふ。

鼻音便には**む**文字を用ふべからず。

促音便もしくは鼻音便を**促呼音便**もしくは**撥呼音便**ともいふ。

音便は、發音の便宜上、多くは**て**または**た**といふ語につづく時に起る。而してもとの音を**原音**といふ。前述き・ぎ・しを原音といひ、っを音便といふが如し。

練習問題

一　伊音便となる主なる原音を問ふ。
二　宇音便となる主なる原音を問ふ。
三　促音便と鼻音便との區別を問ふ。
四　音便のすべての種類を問ふ。
五　音便はいかなる場合に起るものなるか。

次の口語を文語に改めよ。

一　風は寒いけれど、花が咲いた。
二　飯を食ってから遊ばう。
三　勇士は進んで潔く死んだ。
四　新しい本を買うて讀まう。
五　狹い溝を飛んで行かう。

次の音便を原音に改めよ。

去って歸らず。　富んで驕らず。　志を同じうす。　思うて見よ。

たけが低い。　威を逞うす。　笑って應へず。　遊んでをる。
白い花と青い葉。　爭うて進む。　病んで死んだ。　剝いで見る。
なんらの悲慘ぞ。　遊に行かうか。　甘んじて行く。　薄い紙も強い。

第三節　拗音　宇音　長音

行けばよかった　を　行きゃよかった
言ってはいけぬ　を　いっちゃいけぬ
それでは行かう　を　それぢゃ行かう
それはさうだ　を　そりゃさうだ

などいふ時の、きゃ・ちゃ・ぢゃ・りゃの如きものを拗音といふ。

拗音の主なる種類は、左の如し。

きゃ　きゅ　きょ　　ぎゃ　ぎゅ　ぎょ
しゃ　しゅ　しょ　　じゃ　じゅ　じょ

ちゃ　ちゅ　ちょ　　ぢゃ　ぢゅ　ぢょ
にゃ　にゅ　にょ
ひゃ　ひゅ　ひょ　　びゃ　びゅ　びょ　　ぴゃ　ぴゅ　ぴょ
みゃ　みゅ　みょ
りゃ　りゅ　りょ

字音には、拗音甚だ多し。例へば、

ギョシャ(馭者)　ギュー　ニュー(牛乳)　チョージョー(頂上)
キョショ(居所)　ビョージャク(病弱)　ヒョージョー(評定)

など、數へつくすべからず。

拗音をあらはすには、ゃ・ゅ・ょの文字を側に小記す。

字音には、拗音の外、長音といふものあり。例へば、

舊字音の長音　　新定の長音

あう(奥)わう(王)おう(歐)をう(翁)あふ(凹)おふ(邑)……おー
かう(高)こう(口)くわう(光)かふ(甲)……こー
がう(豪)がふ(合)ごふ(業)……ごー
さう(早)さう(曾)さふ(挿)……そー
ざう(藏)ぞう(贈)ざふ(雜)……ぞー
たう(刀)とう(燈)たふ(答)……とー
だう(堂)どう(童)だふ(納)……どー
なう(腦)のう(能)なふ(納)……のー
はう(方)ほう(峯)はふ(法)……ほー
ばう(亡)ぼう(夢)ばふ(乏)……ぼー
まう(毛)もう(蒙)……もー

えう(妖)やう(養)よう(用)えふ(葉)……よー
らう(良)ろう(弄)らふ(臘)……ろー
いう(右)ゆう(雄)いふ(邑)……ゆー

されば、字音の長音をあらはすには、お・こ(ご)・そ(ぞ)・と(ど)・の・ほ(ぼ)・も・よ・ろ・ゆの下に、長音符をつけて記せば、事足るべし。

されど、國語の長音には、長音符を用ふることを許さず。前章音便の條にて、行かうを行こーと書かざるが如し。なほくはしくは、次の綴字法の章にて述べむ。

練習問題

次の拗音を、正しき國語に書き改めよ。

見ちゃいけぬ。　こりゃ惡い　それにゃ及ばぬ。
ありゃ宜しい。　叩きゃひびく。　出來りゃよいが。

飛びゃ危い。　これちゃならぬ。　小供ぢゃあるまい。

次の拗音に、知りたる漢字を宛てよ。

キョ　シャ　ジャ　チャ　ヒョー　リョー
ジョーキ　シャシン　リューキュー　チョーシュー

次の漢字に、發音の假名をつけよ。

商標　優柔　宗教　宮中　橋梁
車掌　納涼　長城　兩用　上流

◉復習雜題

一　假名文字の總數を擧げよ。
二　略音・約音・音通の例語をあげよ。
三　伊音便・宇音便の例語二三を記せ。
四　促音便・鼻音便の主なる原音は何何なるか。

五　口語にて用ふる拗音の例を示せ。
六　字音にて用ふる拗音の例を示せ。
七　長音とは、いかなるものなるか、その例語を示せ。

次の文章中、音韻の書き方の誤れるものを正せ。

一　辛ふじて生命を全ふする事を得たり。
二　今いふた事を忘れたであろー。
三　進むで群がる敵を打ち拂ふたり。
四　白ひ花がうつくしふ咲ひた。

第四章　綴字法

おい(老い)。おい(生ひ)　くい(悔い)。くひ(食ひ)
くらゐ(位)。くらひ(食ひ)　おる(織る)。をる(居る)

などの如く、發音と文字と一致するものあり、一致せざるものありて、甚だ紛らはし。古來これを**假名遣**といふ。(こは本邦の**綴字法**にて、猥に書き代ふることを許さず。

およそ言語には、老い・老ゆの如く活(ハタラ)くものと、くらゐ(位)の如く、活かざるものとあり。活かざる語は、大抵漢字もて書きあらはすことを得れど、活く語の語尾は、常に假名文字を用ふるが故に、綴字法にて、最も注意すべきは、この活く語なり。

されば、以下述ぶる綴字法につきても、活く語を主とし、活かざる語は、その最も普通なるもののみを示さむ。

第一節　い・ゐ・ひ

いと書くべきもの

一、老い　悔い　報い　の三語(い・ゆに活く)。

二、き・ぎ・しなどの音便にて、いとなるもの。

三、かい(櫂)の類。

ゐと書くべきもの。

一、居る　率ゐる　まゐる　の三語。

二、くらゐ(位)　もとゐ(基)　ゐなか(田舍)　ゐど(井)　あゐ(藍)　くれなゐ(紅)　あぢさゐ(紫陽花)　の類。

ひと書くべきもの。

一、合ひ　味ひ　爭ひ　言ひ　行ひ　從ひ　戰ひ　使ひ　追ひ　疑ひ　歌ひ　失ひ　誘ひ　奪ひ　生ひ　强ひ　の類。

二、あひだ(間)　いきほひ(勢)　かひ(貝、效)　こひ(鯉)　たひ(鯛)　たぐひ(類)　つひに(遂に)　さかひ(境)　たとひ(假令)　さいはひ(幸)　の類。

練習問題

次の文章中、綴字に誤あらば正せ。

一　老いたる母は、いなかにあり。

二　どのくらい心配して居るでせうか。

三　過ちは悔ゐ改めよ。恩は必ず酬ひよ。

四　このくれなゐの色はよひが、あのあゆの色はわるひ。

五　友人を率いてまいるべく候あいだ、御誘い下されたし。

六　おほひに疑ひあらば、人に問いて見るべし。

七　たとひ戰は敗るとも、救ゐは乞はじ。

八　法庭にて爭いしかども、ついにそのかゐなかりき。

九　かいにて船を漕ぎ、また海邊のかいを拾はむ。

十　心を失いたる人は、食いたりとて、その味いを知らざるべし。

十一　あの人はよゐ人であるけれども、うたがひ深ひ人であります。

第二節　うふ

うと書くべきもの。

一、植う　飢う　据う　の三語（ゑうと活く）。

二、ひくむなどの音便にて、うとなるもの。

三、さうらふ（候）　やうやう（漸次）　かうべ（頭神戸）

まうす（申）　たうげ（峠）　かうもり（蝙蝠）　の類。

ふと書くべきもの。

一、合ふ　味ふ　爭ふ　など、はひふへに活く語。

二、敎ふ　堪ふ　構ふ　など、へふに活く語。

三、あやふし（危）　きのふ（昨日）　けふ（今日）

ゆふべ（夕）　の類。

練習問題

次の文章中、綴字の誤れるものを正せ

一　飢うるものに食を與う。

二　農夫は爭ふて稻を植ゆ。

三　敎ゆる人に習うべし。

四　書を讀まふか、字を書かふか。

五　言わうとおもうことを、皆いうてはならぬ。

六　行きましようか、止めませうか、聞いて見ましやう。

七　おのれに難を構ゆる人ありとも、決して憂うること勿れ。

八　川に沿ふてのぼりて行けば、山高ふして水清し。

九　霧深ふして路に迷いながら、友の家を訪ふたり。

十　毎度御敎示を辱ふし、迷いも、疑いも、辛うじて晴れ候う。

十一　氣候もようよう暖かにあひなりそうろう。

十二　こうもり傘を杖つきて、とうげをのぼる。

十三　いふべの風に、散る花のいのちはげにこそあやうけれ。
十四　諺にも、正直のこうべに神やどると、もうしさうろう。
十五　きのうきようの暑さには、堪ゆること能はず。

第三節　ゑ　ゐ　へ

ゑと書くべきもの。

一、絶え　越え　見え　など、え・ゆと活く語。
二、ふえ(笛)　えだ(枝)　えり(襟)　え(柄)　の類。

ゐと書くべきもの。

一、植ゐ　飢ゐ　据ゐ　の三語。
二、すゐ(末)　ゆゐ(故)　つゐ(杖)　つくゐ(机)　こゐ(聲)　の類。

へと書くべきもの。

一、言へ　行へ　習へ　など、は・ひ・ふ・へに活く語。
二、加へ　考へ　堪へ　など、へ・ふに活く語。
三、いへ(家)　うへ(上)　かへる(歸る)　ひとへ(偏・一重)　まへ(前)　なへ(苗)　はへ(蠅)　の類。

練習問題

次の文章中、綴字の誤れるものを正せ。

一　つくゐのうえにて字を習え。
二　農夫のいえのまゐに、色絲なるなゐ生ず。
三　飢えて泣く子のこえを聞くに堪ゐず。
四　山を越へたらば、海も見へむ。
五　深く考えざりしがゆへに、失敗せり。
六　ふえの音もたえて聞へず。
七　老人はつえつきて、ひとゐにおのが家にかえらむことを望む。

第四節　おをほふ

おと書くべきもの。

お(御)　おい(老)　おいて(於いて)　おと(音)
おなじ(同)　おのづから(自)　おのれ(己)
おひ(追・負・生)　おほ(大)　おほし(多)　およそ(凡)
おもふ(思)　おる(織)　おば・おぢ(祖母・祖父)の類。

をと書くべきもの。

をり(折)　をり(居)　かをり(薫)　をしむ(惜)
をしへ(教)　をとこ(男)　をみな・をんな(女)
いさを(功績)　をば・をぢ(伯母・伯父)　をの(斧)
をぎ(荻)　をさ(長)　をさなし(幼)　をけ(桶)
をとつひ(一昨日)　を(尾)　をはり(終)　をふ(畢)

をか(岡)　を(緒・苧)　あを(青)　まをす(申)　の類。

ほと書くべきもの。

かほ(顔)　にほふ(匂)　いはほ(巖)　ほのほ(焔)
いきほひ(勢)　おほ(大)　おほし(多)　おほせ(仰)
なほ(尚)　とほる(通)　なほる(直)　の類。

ふと書くべきもの。

あふぐ(仰)　あふひ(葵)　たふす(倒)　の類。

練習問題

次の文章中、綴字に誤あるものを正せ。

一　あのおとこは、おりおり遊んでおる。
二　あのおんなは、おとつひ機ををっておりました。
三　學校の授業をおへてから、遊ばうとをもふ。

四　おほきないはおの上に、あおい松がはへております。
五　朝がをの花は、におひなけれど、愛する人おおし。
六　大將のおうせに從ひ、いきをひに乘じて、敵をたをす。
七　おのれは、おさなき時より、おば伯母)の手に育てられたり。
八　をなじくならば、午後にをいで下されたく候ふ。
九　をいても、なをいきほい衰へず。
十　あをげば尊し師のいさほ。

第五節　わ　は

わと書くべきもの。

一、坐わる　据わる　植わる　の三語。

二、あわ(泡)　あわつ(狼狽)　かわく(乾)　さわぐ(騒)　さわやか(爽)　ことわり(理・斷)　よわし(弱)　たわら(俵)　の類。

はと書くべきもの。

一、思は　言は　習は　など、は・ひ・ふ・へに活く語。

二、あはれ(哀)　いは(岩)　いはゆる(所謂)　いはく(曰)　いはむや(況)　うはさ(噂)　うるはし(美麗)　かは(川・皮)　かはる(變)　かはせ(爲替)　きはむ(極)　くは(桑・鍬)　くはふ(加)　こはし(强)　さは(澤)　さはり(障)　すなはち(則)　たはむれ(戯)　なは(繩)　には(庭)　まはる(廻)　まじはる(交)　をはる(終)　の類。

練習問題

次の文章中、綴字の誤あらば正せ。

一　虎がいわの上に、すわってをります。

二　喉がかはいて、かはの水を飲みました。
三　にわとりが犬に追われて、さはいでゐます。
四　うるわしき花も、よはくして雨に色がはりぬ。
五　あひかわらず、御さはりも御座なく候ふや。
六　友にまじわるには、たはむれにも、惡友の列に加わること勿れ。
七　或人のいわく、人とものを爭はむより、わが習わむ事をきわむべしと。
八　いわゆるわが義軍に加はらざるものの、國民に笑われむは、ことはりといふべし。

第六節　じ　ぢ

じと書くべきもの。

一、輕んじ　重んじ　任じ　など、じ・ずに活く語。

二、あるじ(主人)　はじ(櫨)　にじ(虹)　ふじ(富士)

きじ(雉子)　はじめ(始)　まじる(交)　ひつじ(羊)

さじ(匙)　みじかし(短)　おなじ(同)　いみじ(甚)

の類。

ぢと書くべきもの。

一、恥ぢ　閉ぢ　怖ぢ　などぢ・づに活く語。

二、すぢ(筋)　うぢ(氏)　ふぢ(藤)　あぢ(味・鯵)　かぢ(檝)

をぢ(伯父)　くぢら(鯨)　かうぢ(麹)　もみぢ(紅葉)

の類。

練習問題

次の文章中、綴字の誤あらば正せ。

一　はぢめてふじの山にのぼる。

二　もみじの色はおなぢからず。

三　あるじを加藤うじといふ。
四　このふじの花房は、割合にみじかし。
五　鯵のあじは、いみじくうまし。
六　家すじを重んじて、まじはりを結ぶ。
七　ひつぢの肉を、さじにて食ふ。
八　おぢ恐れて、戸をとじて内に入る。
九　漁夫はかじをとりて、くじらを追ふ。

第七節　ず　づ

ずと書くべきもの。

一、輕んず　重んず　任ず　など、じ・ずに活く語。
二、交ず　倦ず　など、ぜ・ずに活く語。
三、すずし(涼)　すず(錫・鈴)　すずめ(雀)　ねずみ(鼠)
はず(筈)　きず(疵)　すずり(硯)　かず(數)　くず(葛)

かならず(必)　の類。

づと書くべきもの。

一、出づ　秀づ　撫づ　など、で・づに活く語。
二、恥づ　閉づ　怖づ　など、ぢ・づに活く語。
三、まづ(先)　うづ(渦)　うづむ(埋)　みづから(自)
おのづから(自)　くづ(屑)　くづる(崩)　さづく(授)
さへづる(囀)　しづか(靜)　しづむ(沈)　つづき(續)
つづる(綴)　みづ(水)　わづか(僅)　の類。

練習問題

次の文章中、綴字の誤あらば正せ。

一　かの學校は生徒のかづ、わずかなり。
二　すずめのさへづる聲は、かしまし。

三　潜水夫は、みずの中にしずむ。
四　みずからすづりに向ひて、字をつずらむ。
五　義士は生命を輕んじて、君命を重んず。
六　明日は必づ御宅に出づべきはずに候ふ。
七　くづにて造りたる籠に、紙くづを入る。
八　人に抽んずる程のものは、おのづから秀ずる所なかるべからず。

◉復習雜題

左の漢字に正しき假名をつけよ。

田舍　紅　類　夕　笛　白襟　家　上　聲
御敎　女　男　巖　仰せ　直る　岩　川　短し
乾く　爽か　澤　主人　同じ　富士　藤　居る　疵
雑子　織る　顔　薫る　匂ふ　屑　葛　數　水

左の綴字に誤あらば正せ。

老ひ　負ひ　据え　すゑ(末)　堪え　絶へ　うゑ(上)　うゑ(植)
なえ(萎)　なへ(苗)　をり(折)　おり(居)　あを　あをぐ　なを
ことはり　まわる　かわせ　きわむ　にはとり　かふもり　恥じ
はぢ(櫨)　もみじ

左の綴字法の中、正しきものを指示せよ。

一、(候)さふらふ。そーろふ。さうろふ。さうらふ。そーろー。
二、(申)もうす。まふす。まうす。もーす。
三、ありましよう。ありませう。ありましやう。ありましよー。
四、(青)あほ。あお。あを。
五、(倒す)たおす。たをす。たほす。たふす。たうす。
六、(硯の水)すづりのみづ。すずりのみづ。すずりのみず。
七、(家筋)いえすじ。いへすじ。いへすぢ。いえすぢ。

八、(御目出度)おめでとー。をめでたう。おめでたう。おめでとう。
九、(故)いえ。ゆへ。いへ。ゆゑ。いゑ。ゆえ。
十、(幸の始)さいわいのはぢめ。さいはひのはじめ。さひはひのはじめ。

第五章　品詞

口語にても、文語にても、文章といふものは、皆單語より成り立つものなり。

その單語の稱類を**品詞**といふ。品詞を分てば、左の九種となる。

一　名詞　**二**　代名詞　**三**　動詞
四　形容詞　**五**　副詞　**六**　接續詞
七　感動詞　**八**　助動詞　**九**　助詞

第一節　名詞

一、東京は、わが國の首府なり。
二、口は、禍の門といふ諺があります。

右の文章中の、東京・國・首府・口・禍・門・諺などいふ諸語は、いづれも事物の名なり。

事物の名をあらはす語は、**名詞**なり。

練習問題

次の文章中より、名詞を指摘せよ。

一　新高山は、わが國にて、最も高き山なり。
二　太郎は、書物を机の上に置きました。
三　犬は外にありて門を守り、猫は内にありて鼠を捕ふ。
四　學校の課業を畢へてから、散歩をしませう。

五　試驗を畢へたらば、故郷に歸らむ。

六　櫻の花が風に散って、庭は雪が降ったやうになりました。

七　勉强は幸福の母といふ諺があります。

次の諸問に答へよ。

一　教室内の物品につき、名詞三四をあげよ。

二　山の名・川の名各五つをあげよ。

三　人の名と植物と動物との名、各三つをあげよ。

四　形なけれども、なほ物の名なる名詞五つをあげよ。

五　次の○○の所に、適當なる名詞を入れよ。

㊀降り㊁吹く。　㊂にて㊃を書く。　㊄㊅をよく守る。

㊆は㊇に戯る。　㊈は㊉を捕ふ。　㊋は㊌を造る。

第二節　代名詞

一、わたくしは、この本を好みます。

二、あなたは、それを御存じでせう。

三、あれは、そこに居りますか。

四、誰も、かの人の名を知らざるべし。

五、われ、今汝に告げむ。

六、かれは、余が友人なるぞ。

七、ここにも、かしこにも無し。

右の諸文章中の、わたくし・こ・あなた・それ・あれ・そこ・誰・か・われ・汝・かれ・余・ここ・かしこなどいふ諸語は、いづれも名詞の代りに用ひられたる語なり。

名詞の代りに用ひらるる語は、**代名詞**なり。

練習問題

次の文章中より、代名詞を指摘せよ。

一　あの人は、だれもほめて居ります。
二　余を果して誰とおもふか。
三　あなたと私とは、誠に親友であります。
四　こは、たれの本なるか、かれに問はむ。
五　汝は、それをかしこにもち行け。
六　ここに無くば、かしこにやあらむ。
七　わが國に生れたるもの、たれか忠をつくさざるべき。

次の空所に、適當なる代名詞を入れよ。

一　○の筆は、○○のでありますか。
二　○は○の友人ではありません。
三　○○も○の人の名を知るものなし。
四　○○は○○よりも價が高い。
五　○○にある机を○○に持ち行け。

第三節　動詞

一、花咲き、鳥鳴く。
二、本を讀み、字を書く。
三、恩を受けたらば、報いねばならぬ。
四、勉強する人には、賞品が授けられませう。

右の諸文章中の、咲き・鳴く・讀み・書く・受け・報い・勉強する・授けなどいふ諸語は、いづれも動作をあらはす語なり。動作をあらはす語は、**動詞**なり。

練習問題

次の文章中より、動詞を指摘せよ。

一　空晴れて、雲を見ず。
二　花は散りて、雨のみ降る。

三　山を越えたり、谷を渡ったりして、家に歸りました。
四　大人に成っても、煙草を呑むのはよくない。
五　年老いても、なほ衰へず。
六　笑ふ門には福來る。
七　國を富まさむには、實業を勉めざるべからず。
八　大將は兵を率ゐて、群がる敵を追ひ退けたり
九　いざ歌へ、いざ祝へ、わが軍勝てり、わが敵滅びぬ。

次の空所に、適當なる動詞を入れよ。

一　蝶は花に○○、蜂は蜜を○○。
二　汽船は煙を○○、波を○○て、遠きに○○。
三　今課業を○○たれば、公園に○○て○○む。
四　戰爭に○○たとて、商業に○○ではならぬ。
五　何事を○○にも○○○ねば成効しない。
六　人智の○○に從ひて、生活の程度も○○○べし。
七　わが國は四方海にて○○○たれば、商業上天然の地利を○○。
八　朝に○○て、夕に○○こと勿れ。昨は○○て、今は○○こと勿れ。
九　たとひ余を○○人○○とも、余は決してその人を○○することなかるべし。

第四節　形容詞

一、山高く、水清し。
二、青い松の間に、白い花が見える。
三、牛は遲く、馬は早し。
四、樂しきことは、苦しきことの後にあり。

右の諸文章中の、高く・清し・青い・白い・遲く・早し・樂しき・苦しきなどいふ諸語は、いづれも事物の有樣を形容する語なり。

事物の有樣を形容する語は、**形容詞**なり。

練習問題

次の諸文章中より、形容詞を指摘せよ。

一　赤い花が、青い川水の上に流れてをる。
二　汽車は早いけれど、汽船は遲い。
三　嬉しいことは、苦しいことの後に來る。
四　善き友と交はれば、惡しき友は自然に遠ざかる。
五　水は高い所から、低い所へ向って流れる。
六　黑き雲、風にちりて、月の光甚だ淸し。
七　深いか淺いか、試にこの川を渡って見よう。
八　勉强した時は面白いが、遊ぶと後が苦しい。
九　支那は日本より面積も廣く、人口も多し。
十　秋の野には、青き草葉の中より、白き、赤き、また黃なる花など、種種うるはしき花咲き出でたり。

第五節　副詞

一、よく遊び、よく學べ。
二、最も美しきは、櫻の花なり。
三、汽車は、甚だ速に走る。
四、苟も學生たるものは、大いに勉めざるべからず。
五、すべての人に尋ねしかど、更に知らずといふ。
六、恐らくは、この人の中にても、知る人は殆どなかるべし。

右の諸文章中の、よく、最も、甚だ、速に、苟も、大いに、更に、恐らくは、殆どなどいふ諸語は、いづれもその下にある語の意味を限定する語なり。

下にある語の意味を限定する語は、副詞なり。

練習問題

次の文章中より、副詞を指摘せよ。

一　最も恐るべき流行病も、遂にやみぬ。

二　今度の試驗には、殆ど皆及第せり。

三　苟も人として禮なきは、甚だ賤しむべきものなり。

四　余は更に知らず、恐らくはかの人知りたらむ。

五　大いになさむと欲する所ある人は、最もよく勉めざるべからず。

六　快く遊ばむと欲せば、まづ十分に勉強したる後ならざるべからず。

次の空所に、適當なる副詞を入れよ。

一　猫は○○眠る。

二　自轉車は○○早く走る。

三　跡追ひしかど、○○及ばざりき。

四　○○尋ねたれど、○○知る人なかりき。

五　○○よく遊ぶ人は、最も○○學ぶ人であります。

六　未丁年者は、○○○煙草をのんではならぬ。

七　夜○○寢る人は、必ず朝○○起る。

八　○○人の生れて、○○死ぬることのくち惜しからずや。

九　御話の人を私は○○見たことはありませんが、○○○○あの人の事でありませう。

第六節　接續詞

一、雪降り、かつ風吹く。

二、讀本および文典を學ぶ。

三、書を讀み、また字を習ふ。

四、春は來れり。されど風はなほ寒し。

五、雨が降った。しかし、路はわるくない。

六　勉強しなかったゆゑ、落第した。

七　算術を學び、而して後、圖畫或は英語を復習せむ。

八　御待ち申しあげ候間、御出下されたく候。

右の諸文章中の、かつ・および・また・されど・しかし・ゆゑ・而して・或は・間などいふ諸語は、いづれも語句または文章を接續する語なり。

語句または文章を接續する語は、**接續詞**なり。

練習問題

次の文章中より、接續詞を指摘せよ。

一　雪が降ったしかし、すぐに消えるであらう。

二　この筆は、字を書くにも宜しく、また畫をかくにも宜し。

三　暫く遊び、而して後、勉強せむ。

四　敵は小勢なり。されど、決して侮るべからず。

五　昨日は雨天なりしが故に、外出せざりき。

六　今日は雨降り、かつ風烈し。されど、學校には行かむ。

七　修身および國語を學び、或は地理歴史を學ぶ。

次の空所に、適當なる接續詞を入れよ。

一　英語○○數學を習ふ。

二　ひとりで行かうか、○○○友を誘って行かうか。

三　教室内にて話するは惡し。○○○、休憩時間には妨なし。

四　○○然りといひ、○○然らずといふ。

五　かく成り果てしは、天命か。○○また、みづから招ける禍か。

第七節　感動詞

一、　ああ樂しきかな。

二、　いざ行かむ。

三、まづ靜に聞けかし。
四、豈勉强せざるべけむや。
五、まどかにめぐれよ、やよ小供。

右の諸文章中の、ああ。かな。いざ。かし。や。よ。やよなどいふ諸語は、いづれも感動の意をあらはす語なり。感動の意をあらはす語は、**感動詞**なり。

練習問題

次の諸文章中より、感動詞を指摘せよ。

一　わが友も遂に逝きぬ。ああ悲しいかな。
二　敵は將に退かむとす、いざ進め。
三　わが軍兵は、いで一もみと勇んで攻む。
四　人と生れて、豈父母の名を揚げざるべけむや。
五　やよ待て、しばし、君にいふべき事こそあれ。
七　まづおのが側に座せよかし。あな騷騷しき人よ。

第八節　助動詞

一、勇士の名は、永く傳へらる。
二、わが代りに使を行かしむ。
三、かの人は、知らざるべし。
四、この所、落書すべからず。
五、人はみな然りといひけり。
六、昨日やうやう家に歸りき。
七、風吹きて、花は散りぬ。
八、明日も、學校に行かむ。
九、かれは、非常なる勉强家なり。

十、電燈は、燦然たる光を放つ。

右の諸文章中の、らる・しむ・ざる・べし・べから・ず・けり・き・ぬ・む・なる・なり・たるなどの諸語は、いづれも動詞および名詞の下に添はりて、その意味を助くる語なり。

主として動詞、稀には名詞・形容詞の下に添はりて、その意味を助くる語は、**助動詞**なり。

練習問題

次の文章中より、助動詞を指摘せよ。

一　わが庭の花も、散りけり。

二　桃の花も、遂に散りぬ。

三　明日も、必ず晴天なるべしと、かの人はいひき。

四　學生は、煙草をのむべからず。

五　進まむか、退かむか、更に行くべき道を知らず。

六　人に恥しめらるることありとも、忍ばざるべからず。

七　人に譽めらるることありとも、猥に悅ぶべきにあらず。

八　今日せざるべからざることは、明日に延ばすこと勿れ。

次の空所に、適當なる助動詞を入れよ。

一　勉強せば、必ず譽め○○○。

二　落第すれば、人に笑はる○○。

三　昨日行か○と思ひしかど、行か○○○。

四　更に知ら○と、かの人はいひ○○。

五　かれは、熱心○○宗教信者○○。

六　皎皎○○月光に乘じて、友人の家を訪は○。

七　聞く○○○○○ことは、決して聞くに及ば○。

第九節　助詞

一、わが兵士は死を恐れず。
二、この人にこそ賴らめ。
三、かの人ぞいひける。
四、君はいづこに行くか。
五、雨や降るらむ。
六、今日も、汽車は西と東とへ行く。

右の諸文章中の、が・は・を・の・に・こそ・ぞ・か・や・も・と・へ　などいふ諸語は、いづれも下に來る他の語との關係を明かにする語なり。

下に來る他の語との關係を明かにする語は、**助詞**なり。

練習問題

次の文章中より、助詞を指摘せよ。

一　わが親愛なる諸子に告げむ。
二　この品こそ最もよけれ。
三　かの品も惡しからずとぞいひける。
四　いづちへなりとも、勝手に行け。
五　學校の生徒數は、何程なるか。
六　君は知るや、知らずや。
七　かの大將は、文と武とを兼ぬ。

次の空所に、適當なる助詞を入れよ。

一　犬○人○來る○見て吠ゆ。
二　學ぶひま○ありとも、遊ぶひま○○なけれ。
三　かの人○それ○見ざりき○いふ。
四　西○行かむか南に行かむ○と、かの人○迷ひけり。
五　櫻○花○上○、朝日○光○輝いてをるのは、實に綺麗である。

◉復習雜題

次の諸文章を、名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞・助詞の九品詞に分類せよ。

一　笑ふ門に福來る。
二　稼ぐに追ひつく貧乏なし。
三　床の上に花がある。
四　大國民たるものは大いに勉むべし。
五　盜人を見て繩をなふ。
六　鹿を追ふ獵夫は山を見ず。
七　艱難は汝を玉にす。
八　青年は老い易し。
九　光陰は人を待たず。
十　嗚呼今學年も遂に終りぬ。

次の文章中の空所に、適切なる動詞・助動詞・助詞を入れよ。

一　犬○よく主人○恩○知る。
二　水○方圓○器に○○。
三　燦爛○○光○放つもの○、電燈○○。
四　蝶○花○戯れ、蜂○蜜を○○。
五　教へ○○○○事は、よく記憶せ○○○○○○。
六　昨日は雨○○○。されど今日○晴れ○○。
七　文章○正しく○○むには、文典○よく○○べし。

次の問に應じて短文を作れ。

一　名詞四つまたは五つを含める文を作れ。
二　代名詞二つを含める文を作れ。
三　動詞二つを含める文を作れ。

四　形容詞二つを含める文を作れ。
五　副詞一つを含みたる二文例を示せ。
六　接續詞一つを含みたる二文例を示せ。
七　感動詞一つを含みたる二文例を示せ。
八　助動詞一つを含みたる三文例を示せ。
九　助詞一つを含みたる四文例を示せ。

中等國語新文典　一の卷をはり

京極藏書

明治三十七年十一月二日印刷
明治三十七年十一月五日發行
明治三十八年二月廿三日訂正再版印刷
明治三十八年二月廿六日訂正再版發行
明治三十八年三月廿九日三版印刷發行

中等國語新文典奥附

定價	
一の卷	金貳拾錢
二、三の卷各	金貳拾參錢
四、五の卷各	金貳拾五錢

著作者　高橋龍雄

東京市下谷區徒士町三丁目四十九番地
發行兼印刷者　谷川喜三郎

東京市神田區表神保町二番地
印刷所　弘文堂

發行所　東京市下谷區徒士町三丁目四十九番地　啓成社　電話(特)下谷五八〇

關西大賣捌所　大阪市東區南久寶寺町四丁目　前川善兵衛　電話(特)東七三八

不許複製